

巖念寺だより

お盆号/令和2(2020)年



題字 大塚婉嬢 書

菅原篤 画

お盆号/令和2(2020)年

●子供食堂へのご喜捨・ご懇志御礼

先月の「巖念寺だより臨時号」にてお願いしました、生活が困窮しているご家庭への食品等を、次の方々からご寄進等たまわりました。

お送りいただいた品々やご懇志は、家庭支援をしているNPO法人「たいとこネット」を通して、必要とされるご家庭へ届けられます。ご協力いただきまして誠に有り難うございました。

なお、生活が困窮しているご家庭への支援は継続して行っていく必要があります。食品のご寄付は今後も受付けておりますので、ご無理のない範囲で未永く応援していただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

(順不同/五月二十五日までの受付分)



- 常田幸子様 小野英彰様 田村洋・恵子様 黒木昭文様
- 野沢正則様 吉田紀子様 矢崎修・有様 井上健治様
- 南千津子様 水野保雄様 高橋一二様 秋谷えみ子様
- 吉田恒治様 水上典子様 永島幸彦様 片波見路子様
- 増野裕子様 武石美知子様 田島静代様 後藤トシ様
- 斎藤幸久様 吉武佐紀子様 青崎昌子様 その他

●住所等のご連絡先の変更がありました際には必ずお寺へお早めにお知らせください。

●お盆のご案内

東京はコロナウイルスの影響で、これまで経験したことのないお盆を迎えようとしております。そこでお盆参りに際して、お寺より具体的なお願いと提案をさせていただきます。お盆の期間は、東京の場合、**七月十三日(月)～十六日(木)**までの四日間です。そして月遅れの八月の旧お盆期間は八月十三日～十六日になっています。しかし、その期間に参詣が集中してしまうことが懸念されます。

- ① 十三日～十六日以外の日にお参りする。
- ② グループでのお参りは避ける。
- ③ 混雑しそうな時間帯(昼前後)を避けて、なるべく早い時間帯か夕方近くに墓参する。以上をお考えになってみてはいかがでしょうか。

また、巖念寺の感染予防の対応としては、

- ① 七月と八月は午前七時開門・午後六時閉門とします。
- ② 七月十一日(土)～八月十六日(月)までを「お盆月間」とします。
- ③ ※墓花は基本的に用意できませんが、品切れの場合にはご容赦ください。本堂や境内には「アルコール消毒液」や「次亜塩素酸水(消毒液)」を用意しておきますので、どうぞご利用ください。
- ④ 飲料やお菓子のサービスはいたしません。以上、ご理解のほど、よろしくお願い申し上げます。

なお、ひばりが丘墓苑での墓前読経をうけたまわります。ご希望の方はお早めにお寺までご連絡ください。

例年は「新盆法要(昨年の七月以降にお亡くなりになった方のためのお参り)」を本堂で皆様と一緒に勤めしておりましたが、今年はコロナウイルスの感染予防を鑑み、中止することになりました。

その代わりとして、七月のお盆期間から八月のお盆期間までの約一ヶ月間に、新盆を迎えている方のために墓前での読経をうけたまわります。ご都合の良い日時をお電話でお寺までお知らせ下さい。

「お盆」という一年の折り返しの節目を私たちにとって大切なひと時にいたしましょう。なお、お墓参りの際には本堂の阿弥陀仏(ご本尊)にもお参りください。 合掌

●ご奉仕・ご奉納御礼

三月の春彼岸以降、次の方々からお手伝い・ご奉仕をたまわりました。心より御礼申し上げます。(順不同)

- 白田力夫様 ヘンティネン・クミ様 田村洋・恵子様
- 川上よし子様 山川朋代様 岡宗一郎様 武井健祐様
- 西村久美子様 神谷祐紀子様 その他

●ご懇志御礼

次の方々から特別に寄進等をたまわりました。心より御礼申し上げます。(順不同)

- 佐藤誠様 横井弘様 鈴木芳之様 稲垣壽久様
- 青田富士子様 中山章夫様 山口愛子様 松田英之助様
- その他

●「護持管理費」御礼

巖念寺お檀家の皆様には、本年度も「護持管理費」の納入をいただきまして、誠に有り難うございました。ここに重ねて厚く御礼申し上げます。今後ともどうか宜しくお願い申し上げます。なお、ご不明の点などございましたら、お知らせいただければ幸いです。



巖念寺

〒111-0042 東京都台東区寿1-11-2
http://www.gonnenji.com



電話: 03-3844-9383 FAX: 03-3844-9393
E-mail: gonnenji1253@gmail.com

〈当事者〉として コロナ禍と向き合う

梅雨空の下、雨に濡れたあじさいがひととき
わ色濃く感じられます。コロナウイルス流行
の終息がなかなか見通しの立たない中で、い
かがお過ごしでいらっしやるでしょうか。

今回のコロナウイルス禍の特徴として識者
が指摘していることのひとつが「他人事ではな
い／誰も現状から逃れることができない／誰
もが向き合わざるを得ない」ということです。

感染する力や速度が特別なだけでなく、感
染の自覚症状が希薄な場合が少なくないため
に自分がいつの間にか感染しているばかりで
なく、保菌者として他人にうつしてしまっ
ていることが、想像以上の感染爆発を起こす原
因になっているのだそうです。そして、近年
に流行したインフルエンザなど他のウイルス
に比べると、致死率は必ずしも高いとは言え
ないけれども、とにかくワクチンも治療薬も
いまだにないばかりか、日本の場合には感染
を判定する検査態勢も医療態勢も整っていな
かった。

こうしたいくつかの要因が「他人事」では
済まされなくなっている理由でしょう。端的
な言い方をすれば、気づかないうちに、自分
はもとより他者をも死に至らしめるかも知れ
ないという意味で、誰も例外のない当事者
に受け止められるでしょうか。比べながら味
わってみてはいかがでしょうか。

苦からのお釈迦様の一步

ところで、仏教の開祖・お釈迦様の場合は、
私たち凡人とは若い頃から感覚がやはり違っ
ていたようです。それを物語る「四門出遊」
というよくできたエピソードがあります。お
釈迦様の若い頃は、インドの小国の王子とし
て、お城の中で何不自由なく暮らしていたそ
うですが、ある時、そのお城の門から外へ出
た時のことです。

東の城門を出た時、老人の姿を見て、誰も
やがて必ず老いていかねばならないという老
いの苦しみ〈老苦〉を痛感されます。また、
ある時に南の城門を出ると、病人に出会い、
病むという〈病苦〉の現実を深く実感します。
また、ある時に西の城門を出ると、葬式の行
列に出会い、人は必ず死んでいかねばならな
い。やがて死ぬのになぜ生きるのだろうか。
必ず死んでいくという〈死苦〉の現実をリア
ルに感じ取られたのです。

そして、最後に北の城門を出られたとき、
すがすがしい相をした修行者（沙門）に出会
うこととなります。それが引き金となって、
限りある命を、渡世や自分の欲を満たすため
だけに生きるのではなく、老・病・死を超え
た何か大切なことへさとりを求めするための
生活が始まったと言われています。

一見、何でも無いような話に思えるかも知
れませんが、しかし、ブツダ（仏／覚者）に成

であることがはつきりしているということ
です。

実際に私の親しくしていた壮年のお坊さん
が、つい数日前まで会議の隣席で元気に歓談し
ていたのに、どこかで感染して重症化し、約十
日後にはあつげなく亡くなってしまったこと
は大変なショックを受けました。

極めて身近に起こった出来事でしたので、そ
れまでマスコミの報道を少し距離を置いて漠然
と見ていた私もまた「傍観者」ではいられなく
なつたわけです。これほど幅広く全世界が同時
に〈死〉をリアルに意識せざるを得なくなつた
事態は記憶にありません。

業平・南畝・良寛の句

誰でも「平均寿命くらいに達すれば、いつか
は死ぬのは仕方がないな。それでも今日のよう
な日が、何となく、たぶん続いていくのだろう
な（「死」を意識することもなく、「生」のみに
関心が向けられている）」というような漠然と
した思い込みの中で暮らしているのではないで
しょうか。そんな心情をよく代弁してくれてい
るような在原業平（平安時代の有名な貴族・歌
人）の歌があります。

る前の若き日のお釈迦様が、老・病・死を〈自
分自身の事〉つまり〈当事者〉として反応して
いるところが、私たちとの大きなちがいで
いでしょうか。

普通であれば、老・病・死を見ても〈嫌なこ
と〉として目をそらすとします。そして、一
時のこととして、実は〈当事者〉であることを
いつの間にか忘れて、それまでの日常に戻つて
いくのが、私たちの普通のありようです。大き
な病気をせず、長生きして、せいぜい最後に苦
しまずに死ねればいいなという以上になかなか
思いつけないようなところが、凡庸な私たちと
のちがいでしょう。

私の「生」を生き抜くために

さて、話を元に戻しますと、今回のコロナウイ
ルス禍の特徴は「他人事ではない。誰も現状か
ら逃れることができない。誰もが向き合わざる
を得ない。あるいは、誰もが例外のない当事者
である」ということでした。お釈迦様の場合は、
若い頃に既に、これ（老苦・病苦・死苦）に対
して敏感に切実に反応して、それを乗り越える
道をたずねたことが仏教の始まりであつたとい
うわけです。

老・病・死については、私たちは例外なく当
事者です。そして、それを無くすることはできま
せん。老・病・死は、科学がどんなに進歩して
も他人には代わってもらえない事実です。そし
て仏教では、老・病・死の苦しみ・不安・迷
いから離れる道―解脱・さとりを教えます。そ
ういうことからすると、今回の「コロナウイル
ス禍」は、日常の中で希薄になりがちであつた

つひに行く道とはかねて聞しかと
昨日今日とは思はざりしを
（在原業平）

それに対して、江戸時代の狂歌にちよつとお
もしろい、こんな歌があるのをご存知でしょ
うか。

今までは他人が死ぬとは思ひしか
俺が死ぬとはこいつあたまたまん
（蜀山人）

大田南畝（おおた なんぼ / 別号・蜀山人 /
1749年～1823年）という有名な狂歌師の辞
世の句だそうです。

そしてもう一つ、良寛さんという江戸時代後
期に生きた、優れた、そして多くの人から愛さ
れた禅僧の辞世の句を取り上げてみましょう。
この句の背景にどんな仏教のメッセージが託さ
れているのでしょうか。

散る桜 残る桜も 散る桜（良寛）

「辞世」とは、この世に別れを告げること
を言い、辞世の句は、人がこの世を去ろうするこ
とを自覚した時などに残した詩や短い言葉のこ
とです。つまり自身の死としっかりと向き合
つた際に発せられた飾り気のない渾心の表現は
ないかと思えます。

り、見過ごしてきた私たちの根っこにある大切
なことに向き合い、求めてゆけるためのかけが
えのない（仏教の智慧に触れる）機会・動機を
与えてくれると言えらるのではないでしょ
うか。

また、仏教には「生死一如」という言葉があ
ります。「生」と「死」が別々のことではなく
て、ちょうど紙の裏表のように切り離せない関
係でセットになっているという自覚を表す言葉
です。「死」を代表として「老」「病」の苦悩に
向き合うことが、実は同時に〈当事者〉として
の自身の「生」の意味を問い、大切に生き抜
いてゆくためのセットになつたことであると説
いているのです。

この流行を教訓として、今まで〈死〉とい
うことを考えることから切り離されていた私
たちが、大切なことに気づくチャンスにでき
るかどうかは、私たち一人ひとりにかかつて
いるのだと思えます。

お盆は、自分に近い大切な故人を偲び感謝
するためばかりでなく、自分自身の事として
「死」ということに改めて向き合うための大切
な機会にしたものです。

そして、もし仏教に興味をひかれるようであ
れば、厳念寺で実施している講座「ケネス・タ
ナカの仏教教室」(*)の門をたたいてみては
いかがでしょうか。(建)

※詳しくは厳念寺ホームページ (https://www.gonnetji.com/)をご覧ください。とあなたでも閲覧
視聴できます。

仏教の窓